言語少数派の子どもの継続的認知発達の保障
－生態学的支援システムの構築に向けて－

穆　紅

学位取得年月：平成22年3月
取得学位名：人文科学博士
学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】言語少数派の子ども、　認知発達の保障、　生態学的支援システム、　二言語の育成、言語活動のネットワークの展開様相

【要旨】

本研究は、言語少数派の子どもの継続的な認知発達を保障するために、子どもの二言語能力（母語・日本語）をどのように育成・保全することができるかを探り、生態学的支援システム構築のための示唆を得ることを目指す。そのために、4つの研究を行った。

まず、研究1～3では、母語と日本語の認知面の発達を促すために、どのような言語的支援が必要かを探った。具体的には、子どもたちの会話力の認知面に焦点を当て、日本の公立小中学校に在籍する中国語を母語とする子ども52名を対象に母語と日本語によるOBC会話テストを実施し、子どもの保護者49名に質問紙調査を行った。研究1では、母語と日本語の認知面の関係、研究2では、母語の認知面と母語による言語活動の関係、研究3では、母語・日本語の認知面と母語による言語活動の関係について、統計的手法を用いて分析を行った。分析の結果、母語と日本語の会話力の認知面の間に深い関連があり、母語による読み書き、特に幼児期の基礎づくり、小学生の場合は母語の勉強、中学生の場合は母語の読書、また全体的に母語による教科学習を行うことが、母語の会話力の認知面のみでなく日本語の会話力の認知面の発達も促す可能性があることが示された。研究1～3から、来日後でも母語による読み書きを継続的に行う言語的支援が重要であることが示唆された。

研究1～3の結果を踏まえて、研究4では、こうした言語的支援を第二言語環境の中で実現させるためには、どのような非言語的支援が必要かを探った。具体的には、来日後でも母語による言語活動の継続が見られる子どもA（中国語を母語）の事例を取り上げ、Aの生活の中における言語活動のネットワークの展開様相を分析した。その結果、来日直後、来日半年間の間、来日半年後の三段階において、日常的な母語使用・日常的な日本語使用・日本語の学習から、友達との間で行われた母語による読み書きの活動・母語通訳を介した教科学習の活動、さらに母語・日本語による教科学習の活動へと、日常的な言語使用から、読み書きを含める言語活動が行われていたことがわかった。さらに、子どもAの言語活動の広がりとともに、Aの母語と日本語が様々な場面で機能するようになり、Aの生活状況が改善されていったことが見られた。研究4の事例から、言語・言語活動・人間活動の一体化の様相が示され、言語少数派の子どもの言語活動の広がりを促すために、家庭環境や友人関係への支援、先生や学校の姿勢、学校と地域の連携、母語を生かした教科学習の環境整備などの非言語的支援が必要であることが示唆された。

以上の4つの研究から、母国から来日した子どもたちの継続的認知発達の分断を防ぎ、第二言語環境にしっかりと根付いていくことを促すためには、母語による言語活動のネットワークの継続を保障した上で、日本語による言語活動のネットワークを築いていくことが重要であることが示された。そして、それらの言語活動実施のような言語的支援のみでなく、言語活動が実施できる環境づくりや制度の整備などの非言語的支援も必要であることが示唆された。その際に、子ども自身、または子どもを取り巻く親や教師など多様な支援者が、まず母語を要とする親子の絆を強化する、それを軸に据えたより拡張したネットワークを形成するというように、家庭→友人→学校・地域→社会に放射状にネットワークを形成し、子どもたちの新たな環境へのダウンルートを様々な面からサポートしていく生態学的支援システム構築の必要性があると考えられる。

（むう　ほん）